

からざりしなり、

〔東遊雜記 十九〕八月廿三日、天明八年青森に止宿す、此所は諸書にも記し、津輕第一の津湊にして、市中三千軒、繁昌の地とあれども、左様の所にはあらず、むかしは左も有りしや、今はよふく千軒ばかりにて、まかも家居も見ぐるしき、松前の地御城下、并江指浦箱館浦より見れば、勝劣の論なし、さりながら、近き年に此邊大地震にて、一家も残りなく、民家潰れ、死亡の人かぎりなく、相つき凶年にてきかつにおよび、數多の死人ありし故に斯のごとくと、案内のもの言しなり、

〔東遊雜記 二十〕盛岡は、南部大膳大夫侯の城下にて、聞しよりはよき所にて、町の長サ三十餘町、豪家と覺しき商家も數家見え、御案内のもの、申上しは、市中千七百餘軒と言し事なれ共、是は先年より御巡見使へ申上る定りの事にして、實は三千餘軒、城は往來よりは、委しく見えず、土人の物語を聞ば、要害能大城と云、市中へ中津川流れて、町の南にて北上川に落て一流と成、

〔東遊雜記 二十四〕九月天明八年晦日夜四ツ時、仙臺城下へ著す、中扱仙臺城下は先達て聞しよりは、大にちがひ、町々草ぶきの小家まじはり、見惡しき所、數町有り、町の長サ五十餘町、往來筋にて、町内には小石數多ありて、河原のごとし、中六七年以前の寅卯の凶年には、下民數多飢渴して死せし事にして、むかしの形はなしと土人の云ふ也、

〔東遊雜記 二十五〕中村城主、當主相馬因幡守侯、御知行六万石にて、領し給ふの地凡方十里餘、是をさして相馬と稱す、中城は平城にて、城の北方をめぐると町に入る、外見要害の地におもはれ侍りしなり、案内のもの、言は、士家市中合て八百軒餘の地と申せし事ながら、予古河辰がはかり見る處都合して二千五百餘軒、大概よき所也、

〔相馬則胤覺書〕相馬ハ兩流アリ、中一方ハ斯波陸奥守ニ一味シテ、鎌倉合戰ニ討死、依其忠賞、奥州行方莊ヲ賜リ、將軍方ニテ代代在城ス、依之、行方ヲ改名シテ號相馬城、奥州相馬是也、